

大学運動部における「補欠」のアンビバレンスに関する基礎的研究

A consideration of ambivalence in university sport team reserves

種谷大輝 TANEYA, Daiki

立教大学大学院 コミュニティ福祉学研究科 コミュニティ福祉学専攻 博士課程前期課程1年

キーワード：運動部活動、補欠、アンビバレンス、ダブル・バインド

In athletic clubs there are regulars who take part in games and reserves who don't take part in games. This study examined conflict and contradiction among reserves in university sport teams, focusing on ambivalence and the double bind.

This study classified ambivalence into 11 categories, and reserves into 3 categories regarding whether reserves can become regular or not, and I studied the tendency of ambivalence according to the types of reserves.

For example, this study suggested that reserves thinking about becoming regular will have ambivalence about cheering for other members and beating other members, reserves are not clear to be regular have ambivalence about hoping to be regular and giving up to be regular, and reserves who don't think to be regular have ambivalence about continuing club activities for 4 years, dropping out of club activities, and concentrating on other activities such as studies and job hunting.

1. 緒言

1. 問題の所在

運動部活動において試合に出ることのできるレギュラーと試合に出ることのできない補欠が存在する。プロ野球選手である黒田博樹でさえ、上宮高校時代は補欠だった。黒田は著書『決めて断つ』の中で高校時代の苦悩について述べている。高校時代の黒田は自身のような控え投手のことを「エースが投げ過ぎで消耗しないために存在している」(黒田、2013、p.20)と述べた。また、高校時代はピッチングで褒められたことが無く、練習は走るか草抜きをするかのような扱いを受けていたという。黒田はそのような高校時代を「高校が3年間限定でよかった。もし、あの高校生活が4年も5年も続くとなったら自

分にはとても耐えられない時間になっていただろう」(黒田、2013、p.25)と述べている。

このように補欠は、活躍の場がなく、自分の存在意義を見失ってしまいがちであり、試合に出られない中、辛い練習や雑用日々耐え抜いている存在である。

また、セルジオ越後によると、ブラジルでは学校単位ではなく、クラブ単位で競技を行っているため、あるクラブで、試合に出られなくなった選手はまた新しいクラブを求めてプレーをするので補欠が存在しない。しかし、日本では少年期のスポーツは主に学校単位で行われ、大会に出られるのは1校につき1チームである(セルジオ越後、2006)。

2015年5月11日の時点で全日本大学野球連盟の加盟校数が377校であるのに対し、総部員数

は26,326名ほどいる。1チーム25名がベンチ入り出来たとしてベンチに入れる総部員数は9,425名である。全国で17,000名近くの野球部員がベンチにも入れず、補欠として部活動に参加しているというのが現状である。また、2007年5月11日の時点では総部員数は20,147名であり、部員数は年々増加してきている（全日本大学野球連盟、online）。

現在、日本の部活動では1校につき1チームしか出場できないのが一般的になっている。今後、スポーツに関心を持ち部活動に入部する人が増えたとしても現在の制度の状況では補欠が増加する一方である。スポーツ基本法第一章第二条では「スポーツは、これを通じて幸福で豊かな生活を営むことが人々の権利であることに鑑み、国民が生涯にわたりあらゆる機会とあらゆる場所において、自主的かつ自律的にその適性及び健康状態に応じて行うことができるようにすることを旨として、推進されなければならない」（2011年8月24日施行）と明文化されている。しかし、補欠は試合に出られないというだけでスポーツを行う機会が試合に出られる選手に比べて少なくなる。スポーツを行いたいと思えば入部しても試合に出られずスポーツを満足に行うことができない補欠は何のために部活動を行っているのかわからず葛藤を抱えてしまうと考えられる。今後の部活動のより良い指導の方法論を探るうえで、補欠がどのような状況に置かれているのか、どのような葛藤を抱えているのか等について検討する必要があると考え研究を進める。

2. 先行研究の検討

では、補欠とレギュラーでどのように状況が変わってくるのか。青木は、高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因について研究を行い、レギュラー状況が部活動の継続や退部に影響を与える要因であると指摘している（青木、

1990）。

山本は大学運動部への参加動機に関して正選手と補欠選手を比較した研究を行った。山本は、この研究において大学入学以来、インカレ等の主要な大会にほとんど毎回選手として出場してきており、これからもほとんど選手として出場できると思うと調査で回答した者を正選手とし、これまでほとんど毎回選手として出場しておらず、これからも毎回選手として出場できないと思うと回答した者を補欠と分類した（山本、1990）。これを踏まえて、筆者は補欠を「主要な大会に選手として出場していないもの」と定義する。また、山本によれば正選手は補欠選手よりもチームの雰囲気的自由さに動機づけられて運動部に参加し続けているが、補欠選手は正選手よりも健康や体力の維持、増進と、何が何でもやめたくないということが参加し続ける動機になっている（山本、1990）。黒田も自身が3年間高校野球を続けられた要因を「両親に無理を言って、上宮に進学させてもらっていたことが大きかった」（黒田、2013、p.20）と述べており、補欠は、様々な辛い状況と何が何でも辞めたくないという思いとの間でアンビバレンスに陥る存在なのではないかと考えられる。

また、山本は、自分が補欠であることを努力不足のせいにする者ほど記録を向上させようと部活動から得られる満足感に対する期待を部活動継続の理由にしないと指摘した（山本、1991）。これにより、補欠は努力が不足していて練習をしなければならないと分かっているながらも諦めてしまいアンビバレンスを抱え込んでしまう存在なのではないかと考えられる。

これらの研究により補欠というのはアンビバレンスに陥りやすい存在なのではないかと推察した。杉本は、中学・高校運動部員における社会的アンビバレンスの変容について研究を行った。杉本は「中学・高校運動部は、体育集団としての教育的価値と、それとは一応独立した

スポーツ集団としての固有の価値を同時に合わせ持っている状況的アンビバレンスにあるといえる」(杉本、1986、p.198)と述べており、部活動という場がアンビバレンスを生み出しやすい状況に置かれる場であることが示唆された。また、指導者との意見の不一致という場面でアンビバレンスのない部員ははっきりと自分の考えを言うのに対し、アンビバレンスのある部員は言っても仕方がないとあきらめる傾向があることが指摘され、アンビバレンスを抱える原因として指導者とのコミュニケーションの閉塞があることが示唆された(杉本、1986)。この研究により時期による部員の抱えるアンビバレンスの変容は明らかになったが、正選手と補欠選手といった選手のタイプ別によるアンビバレンスの変容については明らかになっていない。

また、杉本と塩川は大学運動部における女子マネージャーの社会的アンビバレンスについて研究を行った。彼らの研究によれば、選手のマネージャーへの役割期待とマネージャー自身の役割認識には不一致が生じる(杉本・塩川、1989)。

しかし、選手としての役割も兼ねる補欠はマネージャーとは異なるアンビバレンスを抱える存在なのではないかと考えられる。補欠に着目したアンビバレンスの研究への取り組みはまだ見られない。また、監督やレギュラー選手、他の補欠選手との関係によってどのようにアンビバレンスに変容していくかという点も明らかになっていない。

さらに杉本の研究は社会的アンビバレンスの核心的タイプに着目した研究であり、より総合的な視点により補欠部員の抱えるアンビバレンスについて検討を行う必要があると考えられる。補欠の抱えるアンビバレンスを明らかにすることにより、山本の言う補欠の何が何でもやめたくないという部活動への参加動機の内容が明らかになるのではないかと推察する。また、

山本は、「正選手とは異なり補欠選手を運動部へと積極的にかかわらせている独特な要因については明らかではない」(山本、1991、p.54)としており、補欠の抱えるアンビバレンスを明らかにすることで、補欠を積極的に運動部に関わらせている要因についても明らかになるものと考えられる。

3. 研究の目的

アンビバレンスやダブル・バインドという語の持っている意味内容について再検討し、大学運動部における補欠の置かれている葛藤状況や、抱え込んでいる矛盾を把握する上での有効性を検討すること、また、それを踏まえたうえで、補欠の抱えるアンビバレンスのタイプを検討することを本研究の目的とする。

II. 分析枠組みの提示

1. アンビバレンスと補欠

1) 近代的自己とアンビバレンス

では、人はどういった時にアンビバレンスを抱えるのだろうか。架場によると、近代の自己はアンビバレンスを抱えやすい(架場、1981)。近代の自己が抱えるアンビバレンスについて分析することにより補欠がどういった時にアンビバレンスを抱えるのかを知る手掛かりになると考え分析を行う。

まず、アンビバレンスの概念から整理していく。アンビバレンスとは一般的に「同一の対象に対して相反する傾向・態度・感情、特に愛と憎しみが同時に存在する精神状態」(架場、1981、p.25)を指している。しかし、R・K・マートンとE・バーバーは、アンビバレンスの概念を単に心理的状态についての概念であるにとどまらず、より広い文脈に持ち出した。彼らは、アンビバレンスを基本的に、人々が相矛盾する要請に同時にさらされる時、これらの要請に同時に応えることができないところから、それが

行動や態度の振動となって現れたものと考えた。そして、それがどのような仕方でも社会関係の構造の中に仕込まれているかという点に焦点を当てた(架場、1981)。彼らがこの社会学的アンビバレンスの核心的タイプとみなしているのは、「単一の地位における単一の役割の中に相矛盾する規範的期待が組み込まれている場合」(架場、1981、p.26)である。補欠は、監督やレギュラー、他の補欠選手から相矛盾する役割期待を受ける存在である。まず、監督は補欠選手に対し、レギュラーとして活躍できるようにもっと野球の練習を頑張れと言う一方で、野球ばかりやってもダメで、サポーターとしてチームを支えていけるような人間になりなさいという。レギュラーは、補欠に対し、チームが強くなるためにはチームの底上げが大事でレギュラーを追い抜くつもりでもっと練習しろという一方で、レギュラーは補欠に対し、レギュラーの練習のサポートを頼むために補欠は練習時間が取れない状況となっている。また、他の補欠からは、レギュラーになれるように頑張ってもらいたいと期待されている一方で自分の方が先にレギュラーになりたいからそこまで頑張ってもらいたくないとも思われている。このように異なる立場の人間から板挟みにされる補欠は、様々な相矛盾する役割期待を持たれ、アンビバレンスに陥ってしまう。

また、我々にとって、外界の出来事や刺激はそれ自体として何かの意味を持っているわけではなく、それらが意味を持つのは、それらが何らかの文脈の中に意味づけられたときであり、通常、我々は何らかの文脈を通じて刺激を受容している。社会が持つ文化や制度はこの文脈の主要な源泉である。しかし、主体にとって、彼のおかれた状況の文脈は単なる所与ではない。彼は自らの関心にしたがって状況を主体的に文脈化し、定義する側面を持つ。さらに、他者と状況を共有しようとする限り、状況はその定義

を巡る他者との相互交渉の中で構築されねばならない。社会が提供する客観的な文脈が弱まるようなときには、このことは、人々を取り巻く状況の安定した現実感を奪い、状況の相対化をもたらす。したがって、人々は、様々な文脈から状況の定義の齟齬に出会って困惑しなければならない機会が多くなる(架場、1981)。「一つの状況が複数の文脈を持ち、それぞれが互いに背反する要請を同時に課すとき、人は状況的アンビバレンスにおちいる」(架場、1981、p.27)。選手は補欠になったりレギュラーになったりと役割が常に変動していく存在である。よって、選手は日々異なる状況の中におかれる。日々の状況に安定した文脈を持たない補欠は常に自分の置かれた状況を他者との関係から模索していき役割を獲得していかなければならない。その中で状況的アンビバレンスに陥ることが考えられる。

架場によると、近代社会は状況的アンビバレンスを生み出しやすい条件を持っており、その理由として一つは、近代化の進行とともに、制度が人々の相互作用に安定した文脈を提供する力を弱めていくことであり、もう一つは、個人の人格を神聖視する理念の浸透による自意識の深化である(架場、1981)。架場は、近代の自己が抱えるアンビバレンスの例をいくつか挙げているがその中でドフトエフスキーのおとなしい女の例と自己を神格化する者の例を挙げ、補欠の抱えるアンビバレンスにはどのようなものがあるか考察していく。

ドストエフスキーは『おとなしい女』の中で男と妻の間の葛藤を描いている。男は軍隊にいたときに臆病者という風評を立てられ軍隊を追い出される。その後も過去の不名誉や周りからの嘲笑に頭を悩ませ続ける。これに復讐するために親友が必要だと考える。彼はわざと孤児を見つけ求婚する。最初、彼女は救済に関する感謝から、率直な愛情を持って男の懐に飛び込ん

でくる。しかし男は愛情を求めたのではなく崇拜を求めた。しかも、彼が欲したのは施しによる尊敬でも、服従による尊敬でもなく、自由な意思による尊敬、自発的な精神による苦悩の理解にもとづく敬意だった。当然この傲慢な夢は実現しない。それどころかおとなしい女は、自分の感情を冷淡にあしらわれたことに侮辱を感じて反逆し始める。女も貧しいとはいえ気位の高い自尊の感情の強い女だった。威信をめぐる二人の戦いの究極が男の敗北に帰し、和解が訪れたかのように見えたとき、突然女は聖像を抱いたまま窓から身を投げてしまう。彼女自身が彼女の勝利を許すことができなかったからである。夫の悪魔主義に感染することによって彼女は自分の愛がすでに滅ぼされていることに気が付く。男は女の死を偶然の行き違いのせいにしたがった。しかし、真に行き違いが起こっていたのは彼らの間のコミュニケーションである。彼は私を尊敬せよという命令を発する。だがこの命令はパラドキシカルである。近代的風土においては尊敬の観念には自発性が不可欠だからである。近代社会における人間は命令されて尊敬したり、愛したりすることはできない(架場、1981)。補欠部員はプレーがあまり上手くないのでプレー面で他人に尊敬をされるのが少ない。だからと言って、他人に尊敬を強要することはみじめであるし、上記に述べられているように人は命令されて人を尊敬することはできない。そのため、補欠は他人からの自発的な尊敬を得るために他人の練習のサポートをしたり、後輩の指導を行ったりする。他の選手は自分のことを思って補欠が活動してくれていると思い補欠の行動の意図を自分への愛情だと感じるが、補欠自身の行動の意図が自発的な尊敬の要求だった場合双方の考えに食い違いが生じる。補欠が他者の尊敬を得ようと他者のために行動したにもかかわらず他者からの尊敬を得られず、ただ単に上手く利用されてしまった場合補欠は葛

藤を生じる。また、補欠のサポート行動を愛情だと感じている他者に補欠の尊敬されたいと言う本意が見抜かれてしまった場合、補欠は他者の信頼を失ってしまう。そのため、補欠は尊敬されたいという本意を隠し、他者への愛情を持っていることを装わなければならない。

自己を神格化する者は、自己が神であって他者に依存しないことを証明しなければならない。人々は互いに、他者にそれを確認させることによって証明しようとする。なぜならあらゆる認識は他者と共有されなければ十分な意味で現実的なものとならないからである。結局、彼が神であるかどうかは、他者が神とみってくれるかどうかにかかっている。ここでも他者への無関心を示しえたものが勝つ。無関心なものは自己の存在だけで自足しているかのように見えるからである。そこで人は他者に無関心であることを他者に向かって訴えて回らなければならない。だが、他者へのアピールほど自尊心を傷つけるものはない(架場、1981)。運動部活動において、選手は監督に自分がレギュラーになれるようにアピールをする。しかし、あまりにもアピールが過ぎると監督に「監督の顔色ばかりを窺ってプレーをする選手」だと思われてしまう。選手はアピールをしなければならないが、監督にアピールをしていないように装わなければならない。また、監督がいない、もしくは監督が選手決定権を持たない部活動では選手達だけでレギュラーを決めることになる。レギュラーになるためには他者にレギュラーとして認められる必要がある。そのためには自分が試合に出られるようアピールしなければならないが、チームスポーツにおいて「自分を出すべきだ」という自己中心的なアピールは他者の信頼を失うことにつながる。選手は他者に認められなければならないがアピールすることはできないという状況に陥る。さらに、小林は、補欠選手は「仲間に対して自分の辛さ・苦しさを打ち明けて共有

してほしいと思っている一方で、自分が使えない選手と思われぬように悩みを抱えていないかのように振る舞ってしまい、自分が抱えている問題を打破することができない」(小林、2013、p.68)と述べており、こうした場合も上記と同じような構造によりアンビバレンスを生じていると考えられる。

2) ダブル・バインド

上記で述べた状況的アンビバレンスの例として架場はたまたま会社の便所で上司と隣り合わせた社員の例を挙げている。この社員は、排泄行為中は他者との関わりを避けなくてはならないが上司にはあいさつしなければならないという状況に置かれる。この時、社員は二重の文脈に由来する背反的要請によって一瞬のためらいに陥る。しかし、この例の場合は背反する二つの文脈が同じレベルに並置されており、これを分離・対象化してどちらかを優先させるなどの調整を行うことが容易である。ところが、「背反する文脈の一方が他方のメタ・レベルにあるために、これを対象化して対処することができず、時には状況の有意味な文脈を全く認知することができなくなるような場合」(架場、1981、p.28)がある。このような状況的アンビバレンスの核心的タイプは、G・ベイトソンらが提唱したダブル・バインド (Bateson、1972、pp.201-227) である。

前節の近代的自己とアンビバレンスのところで挙げた補欠の抱えるアンビバレンスは混乱には陥るもののどちらかを優先し対処可能ではある。この節では補欠が他者からの背反するメッセージに対し、どちらにも応えられず動けなくなってしまうような場合はどういった時に生じるのか分析を行っていく。

架場によると、人間のコミュニケーションの特質は、コミュニケーションが同時に複数の意味の水準で行われることである。人々は、メッセージを交換しながら、同時にそのメッセージ

に関するメッセージ(メタ・メッセージ)を交換している。例えば、何かを言いながら、同時にその語調やしぐさなどで「これは冗談だよ」と伝えるようにである。また、時には、メッセージとメタ・メッセージが排反する場合がありうる。例えば、「私は嘘を言っている」という言葉の中には、字義通りのメッセージと、さらにメッセージ全体に言及するメタ・メッセージが含まれており、「嘘を言っている」というメッセージと「嘘を言っていない」というメタ・メッセージとの間にパラドックスが生じる。権力的な関係において、このようなパラドキシカルな状況が、弱者に対して強制される時、ダブル・バインド的状况が生じる。「あらゆる命令に従うな」「自発的であれ」といった命令は、あることを強制しながら、同時にそれをなすべきでないことを命令する(架場、1981)。例えば、ミーティングを行う際、補欠がチームに対する不満を言いなさいと言われたとする。しかし、監督批判をしたら監督に怒られるし、技術的な面でのチーム批判をしたら他の選手から「補欠で下手なくせに技術について語るな」と思われる恐れもある。かといって不満を言わないと怒られてしまう。こういった場合、不満を言えばいいのか、言ってはいけないのか補欠は分からなくなってしまう。

また、実際のダブル・バインド状況においては、メタ・メッセージが言明自体の中に含まれている必要はなく、むしろ、メッセージが発せられるときの語調、表情、身振りなどの非言語的媒体、さらには、より広い状況の前後関係などがメタ・メッセージとして働いているのが普通である。こういったダブル・バインドな状況の例として架場は、R・D・レインの『結ばれ』の例を取り上げている。あらすじをまとめると、ある母親が、精神変調から回復したばかりの息子に会いに行く。彼が彼女の方に向かっていくとき、彼女は、彼が彼女を抱擁できるように、

自分の腕をひらく。しかし、彼が近づこうとすると、彼女は硬直する。そして彼は立ち止まる。彼女は「お母さんにキスをしたくないの?」と言う。そして彼がまだなお立ち止まっていると彼女は「自分の気持ちを恐れてはだめよ」と言う。彼はキスするよという彼女の招きに応じようとするが、彼女の姿勢、強ばり、緊張が彼にキスさせないように仕向ける。彼女は彼を招きながら、実際には彼との親密な関係を恐れている。そして、そのことは両者のどちらにとっても意識化されていない。彼は次のような声にならないメッセージに回答する。〈私はお前が私の所に来てキスをするように自分の手を広げてはいるが、実はお前がそうするのを恐れている。しかし、そのことを私自身に対してもお前に対しても私は認めることが出来ない。だから私はお前があんまり具合が悪いためにそうすることが出来なくなることを望む〉。彼女はキスされることを率直に望んでいるのだと述べ、彼がそうしないのは、そうしてはいけないという彼女の命令を認知したからではなく、彼が自分からそうしないのだと言うことがほのめかされる。彼女は本当はこう伝えているのである。〈私を抱擁しなさい。でなければ、私はあなたを罰しますよ〉しかも〈この命令を自分から無視しなければ、あなたを罰しますよ〉。彼女はあることを命令しながら、その命令に関して何かを命令し、この二つの命令が排反する。この命令に服従するためには、服従しないことを余儀なくされる。このような命令に対処するにはメッセージとメタ・メッセージを識別し、その排反性を対象化する以外にはない。しかし、彼の生存にとって彼女との関係が不可欠である場合には、それは困難なことである。彼はメッセージの構造に関して正確に解釈したり、コメントしたりすることを事実上禁じられている。多くの場合、彼はメッセージを正確に識別する代わりに、〈自分には母を愛する能力が無い〉といった欺瞞の中に

とどまりながら動揺を続ける以外に適当な方策が見つからなくなってしまう(架場, 1981)。例えば、監督に補欠がレギュラー目指してプレーヤーとして頑張っていくべきか、チームのためにマネージャー等サポートに回るべきか相談をしたとする。そのとき、監督が口では「レギュラーに絶対なれるからこれからはプレーヤーとして頑張っていくなさい」とはいうものの表情や身振りなどから〈君はレギュラーになるのは難しいから、サポートに回るべきだ〉というメッセージが発せられていた場合補欠選手はどの期待に応えればよいかわからず動けなくなってしまう。

2. アンビバレンス及びダブル・バインドのタイプ

1) アンビバレンスの分類

ここで、アンビバレンスのタイプを種類別に分類を行う。

プロイラーは、「人の思想や観念の中で生じるのが知的アンビバレンスであるとし、直接の恋愛や家族愛といったものの中で対立して生じるのが情緒的アンビバレンスであるとし、将来に向けての希望や願望の中で相対立するものがある時、意志的アンビバレンスが生じている」(辻, 2001, p.9)としており、アンビバレンスを三種類に分けた。これら三つのアンビバレンスは心理学的なアンビバレンスである。

また、辻によると、マートンは、社会学的アンビバレンスのタイプを六つに区分した。一つ目が、社会学的アンビバレンスの中では核心的なタイプで、特定の社会関係においてある地位を占めている人々に相矛盾する要求をするものである。二つ目が、派生的なタイプで、個人の地位群の中の地位葛藤にみられるアンビバレンスであって、例えば、職場の地位と家族の地位との間で生じるもので、個人の地位群における諸関心や諸価値の葛藤を意味しているもの。三

つ目が、二つ目のタイプに類似しているものの特定の地位に結び付く、いくつかの役割相互間の葛藤であって、例えば、大学教授や研究機関に勤める研究者でいえば、研究の役割、管理の役割、教育の役割の間でアンビバレンスに陥るときがこの例である。四つ目が社会の諸成員の抱いている文化的価値が矛盾するもの。五つ目が文化的に規定された志望とこのような志望を実現するための社会構造上の通路との食い違いによる、文化構造と社会構造との間の葛藤によるもの。六つ目が二つ以上の社会に生活し、そのために相異なった系統の文化的価値を志向するようになった人々のなかに生じるものである(辻, 2001)。

そして、前述の状況的アンビバレンスと状況的アンビバレンスの核心的タイプであるダブル・バインドを加えるとアンビバレンスのタイプは十一種類に分類することができる。

2) 将来見通しから見た補欠のタイプ

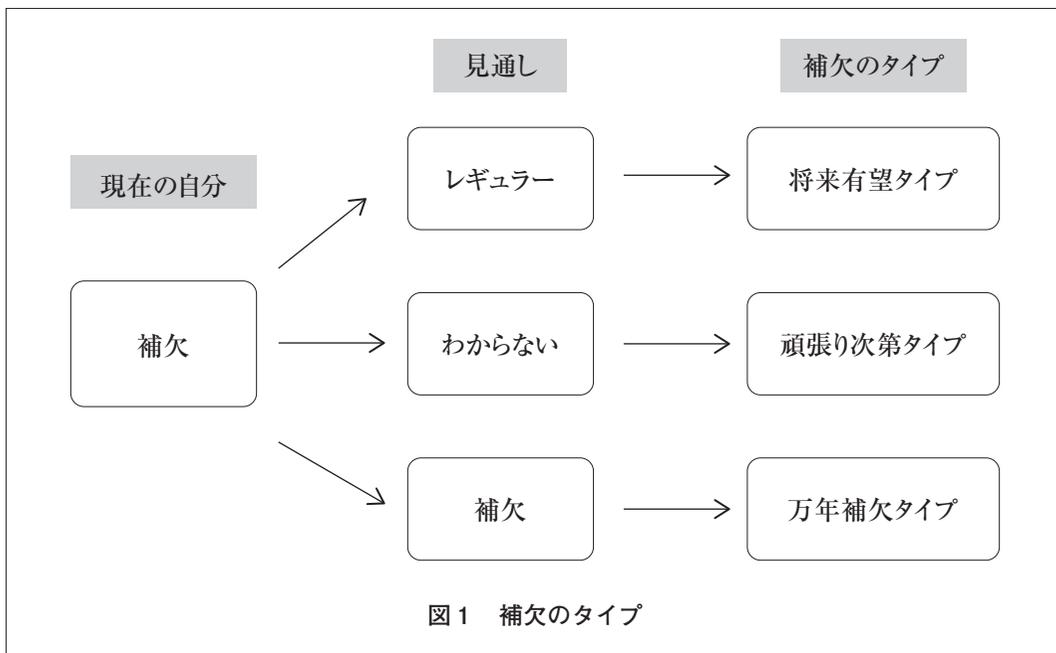
現在、補欠選手がこれから試合に出場できるかどうかの見通しの観点から補欠を三つのタイプに分類する。補欠選手の中で、これからレギ

ュラーになれる見通しがある選手を「将来有望タイプ」、レギュラーになれるかどうかわからない選手を「頑張り次第タイプ」、レギュラーになれる見通しがない選手を「万年補欠タイプ」と命名できよう。

3) 補欠をめぐるアンビバレンスの諸相

実際に補欠は部活動においてどういったアンビバレンスを抱えるのだろうか。前節で述べたアンビバレンスの分類及び将来性から見た補欠のタイプと連動させて考察していく。

まず、補欠というのは他の選手を応援しなければならぬ立場である一方で、レギュラーになるため他の選手を越えなければならない立場に置かれる存在である。また、補欠は頑張ればレギュラーになれるかもしれないという期待に満ちた感情とどうせ頑張っても無理だという諦めの感情との間でアンビバレンスを生じると考えられる。これらのタイプは、プロイラーの言う人の思想や観念の中で生じる知的アンビバレンスに該当するタイプである。前者のタイプは、レギュラー選手を追い抜きレギュラーになる見通しがある「将来有望タイプ」の補欠に多く見



られるアンビバレンスであると考えられる。後者のタイプはレギュラーになれる見通しがわからず、努力すればレギュラーになれるかもしれないし、諦めてしまえば補欠のままかもしれないという状況に立たされる「頑張り次第タイプ」の補欠に多く見られるアンビバレンスであると考えられる。

補欠は、レギュラーになれないと分かった時、信頼する他者から異なるアドバイスを受けることがある。例えば、両親からは「学生コーチになるべきだ」とアドバイスを受け、交際している彼女からは「マネージャーになるべきだ」とアドバイスをされたとする。その際、どちらのアドバイスに答えればよいかかわからず補欠選手はアンビバレンスに陥ると考えられる。このタイプは、情緒的アンビバレンスに該当するタイプである。このタイプはレギュラーになれる見通しが少なく、自らの運動部での役割やアイデンティティをどこに求めるかという点や多様な役割を課されるという点で自分が今後どうすればよいかを他者に相談することが多い「万年補欠タイプ」の補欠に多く見られるアンビバレンスであると考えられる。

さらに、補欠の中には学生コーチになってチームをサポートし、貢献したいと思っている一方で、レギュラーになることも諦め切れず、選手としても頑張っていきたいという、学生コーチにもレギュラーにもなりたいという二つの希望が対立する形のアンビバレンスを抱える選手も考えられる。このタイプは、将来に向けての希望や願望の中で相対立するものがある時に生じる意志的アンビバレンスに該当するタイプである。学生コーチは、レギュラーを含めた全部員の指導を行うため、レギュラー陣と劣らない実力を持った選手から選出される場合が多い。そのため、レギュラーになれる見通しのある「将来有望タイプ」の補欠に多く見られるアンビバレンスであると考えられる。

監督が選手に対しプレーヤーとして練習を頑張りなさいという要求とサポーターとして練習のサポートをなさいという要求をし、それが相矛盾する要求となった際には、前で述べたマーティンの社会学的アンビバレンスの一つ目のタイプである特定の社会関係においてある地位を占めている人々に相矛盾する要求をするタイプのアンビバレンスが生じる。このタイプは、今後プレーヤーを目指し練習をしていけばよいのか、チームのためにサポーターとして練習のサポートをしていけばよいのかかわからず、先行きが不透明な状況におかれる「頑張り次第タイプ」の補欠に多く見られるアンビバレンスであると考えられる。

クラスの中では目立った存在だが、部活内ではプレーがあまり上手でなく、補欠としてあまり目立つことができないといった学校生活の中で地位と部活内での地位の間にアンビバレンスが生じる場合もある。このタイプはマーティンの社会学的アンビバレンスの二つ目のタイプである個人の地位群の中の地位葛藤にみられるアンビバレンスに当てはまる。このタイプはレギュラーになれる見通しがなく、プレーで目立つことが少ない「万年補欠タイプ」の補欠に多く見られるアンビバレンスであると考えられる。

大学運動部の場合、選手はプレーヤーとしての面以外にも役割を課されることがある。例として主務になった補欠を挙げると、レギュラーになるために練習を頑張らなくてはならないが、練習試合の申し込みやOBとの連絡などやらなくてはならないことがたくさんある。今はどの役割を優先して行うべきかわからなくなりアンビバレンスに陥ると考えられる。この時、マーティンの社会学的アンビバレンスの三つ目のタイプである特定の地位に結び付く、いくつかの役割相互間の葛藤に当てはまる。このタイプはレギュラーになれる見通しがあるため、出来るだけプレーに集中したいが、いろいろな役割が課

されてしまう「将来有望タイプ」の補欠に多く見られるアンビバレンスであると考えられる。

また、レギュラーにはなりたいがレギュラーになるために毎日休まず部活に行き監督の言うとおりに行動するのが嫌という部活内の人間が持っている価値観と自分の価値観が矛盾する場合、また、小林が、「競技スポーツにおけるチームは、競技生活をより豊かにし、自己を表現する場といえる一方で、選手がチームに忠誠を示すことを強要し、禁欲的になるように仕向けていくという両義性を抱えている」(小林、2013、p.68)と述べているように、選手が自己表現と服従の圧力との間でアンビバレンスを感じている場合、マートンの社会学的アンビバレンスの四つ目のタイプである社会の諸成員の抱えている文化的価値が矛盾するものに当てはまる。このタイプはチームの価値観に従えばレギュラーになれるかもしれないし、自分の価値観で今後活動していけばレギュラーになれないかもしれないというどちらの価値観に合わせるかによってレギュラーの見通しが変わってくるような「頑張り次第タイプ」の補欠に多く見られるアンビバレンスであると考えられる。

さらに、怪我をしている補欠の場合、レギュラーになるためには無理をしてでも出場して結果を出さなければいけない一方、これ以上やると試合に出られないほど怪我が悪化してしまうというアンビバレンスを抱えることがある。このタイプは、マートンの社会学的アンビバレンスの五つ目のタイプである文化的に規定された志望とこのような志望を実現するための社会構造上の通路との食い違いによる、文化構造と社会構造との間の葛藤によるものに当てはまる。このタイプは結果を出せばレギュラーになれる見通しが立つが、結果を出せなければ補欠になってしまう「頑張り次第タイプ」の補欠に多く見られるアンビバレンスであると考えられる。

補欠の中には、部活の外にアイデンティティ

を求めるタイプもいるだろう。そうしたタイプの補欠は、他からの練習してほしいという要求と自分の練習したくないという思いとの間にアンビバレンスを生じる。また、補欠の場合、レギュラーになれないが四年間部活動を続けることに意義を見出すか、もうやめてしまい勉強や就職活動を頑張り良い進路を見つけることに意義を見出すか、部活と進路との間にアンビバレンスを生じることがあるだろう。これらのようなアンビバレンスはマートンの社会学的アンビバレンスの六つ目のタイプである二つ以上の社会に生活し、そのために相異なった系統の文化的価値を志向するようになった人々の中に生じるものに当てはまる。これらのタイプはレギュラーになれる見通しもなく、部活動のどの部分に継続する意義を見出せばよいのかわからなくなりがちである「万年補欠タイプ」の補欠に多く見られるアンビバレンスであると考えられる。

レギュラーと補欠の境界線上にいる選手は自分が今レギュラーなのか補欠なのかわからなくなり自分に求められている役割が何なのかわからずアンビバレンスに陥ると考えられる。これに加え、前述の他者からの自発的な尊敬を求めた状況における補欠の抱えるアンビバレンスやアピールと無関心との間に生じるアンビバレンスは状況的アンビバレンスに該当するタイプである。一つ目のタイプはレギュラーになれるかどうかの見通しが不透明である「頑張り次第タイプ」の補欠に多く見られるタイプだと考えられる。二つ目のタイプはレギュラーになれる見通しがなく、プレー面で尊敬をされることが少ない「万年補欠タイプ」の補欠に多く見られると考えられる。三つ目のタイプはレギュラーになれる見通しがあり、これからどんどん自身のプレーをアピールしていきたいと考えている「将来有望タイプ」の補欠に多く見られるアンビバレンスであると考えられる。

そして、ミーティング等の場で補欠が監督か

らの「自分に対する不満があったら自由に言え」といった、答えても答えなくても怒られてしまうような背反するメッセージに対しどう答えたらよいかわからず動けなくなってしまうダブル・バインドの場合がある。このタイプはレギュラーになれる見通しがあり、監督の評価を下げるようなことは絶対に避けたい「将来有望タイプ」の補欠に多く見られるアンビバレンスであると考えられる。

3. まとめ

本研究では、大学運動部における補欠の置かれている葛藤状況や抱え込んでいる矛盾についてアンビバレンス、ダブル・バインドに着目して検討を行った。

その結果、アンビバレンスは、三種類の心理学的アンビバレンス、六種類の社会学的アンビバレンス、状況的アンビバレンス、そして状況的アンビバレンスの核心的タイプであるダブル・バインドといった多様なタイプに分類可能であることが示唆された。架場によると、心理学的アンビバレンスは矛盾する要請がパーソナリティに由来し、社会学的アンビバレンスは文化・社会構造に由来し、状況的アンビバレンスは人々の相互作用する状況に由来している。このように、多角的な視点により補欠の抱えるアンビバレンスを分析することで、杉本らの研究で見られた運動部員の抱える構造的なアンビバレンスだけでなく、パーソナリティに由来するものや、人々の相互作用に由来するものまでを視座に取り込むことができるなど、多様なアンビバレンスの様相を分析する上での有効性が示唆された。

そこで得られた十一種類のアンビバレンスに応じて、具体的に補欠がどのようなアンビバレンスを抱えるのかについて検討した。検討に当たっては、補欠がこれから試合に出られるかどうかの見通しの有無により補欠の置かれる状況

も異なると考え、「レギュラーになれる見通しがある」、「レギュラーになれるかどうかわからない」、「レギュラーになれる見通しがない」という三つの観点から補欠を「将来有望タイプ」、「頑張り次第タイプ」、「万年補欠タイプ」の三つのタイプに分類した。そこで、補欠のタイプごとに、どういったアンビバレンスを抱える傾向にあるのか検討を行った。

その結果、レギュラーになる見通しがある「将来有望タイプ」の補欠は他の選手を応援しなければならない一方で、他の選手を越えなければならないアンビバレンスを抱えることが示唆された。また、レギュラーになれるかどうかわからない「頑張り次第タイプ」の補欠は頑張ればレギュラーになれるかもしれないという期待に満ちた感情と、どうせ頑張っても無理だという諦めの感情との間でアンビバレンスを生じると考えられた。さらに、レギュラーになれる見通しがない「万年補欠タイプ」の補欠は、レギュラーになれないが四年間部活動を続けるか、それとも辞めてしまい勉強や就職活動など他の活動に専念するかといったアンビバレンスを抱えることが示唆された。

今後の課題としては、大学生の運動部員を対象として、補欠のタイプによってどのようなアンビバレンスの様相が見られるのか実証的に検討することが求められよう。

【参考文献】

- 青木邦男 (1990)「高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因」体育学研究、34 (1): 89-100.
- 架場久和 (1981)「近代的自己とアンビヴァレントな状況」現代社会学、8-2: 25-39.
- 黒田博樹 (2013)『決めて断つ』KKベストセラーズ.
- 小林洋平 (2013)「チームスポーツにおける対人関係の複雑さ：スポーツの持つ両義性からの考察」金城学院大学論集自然科学編、10 (1): 62-69.
- 文部科学省 (2011) スポーツ基本法 <http://www.mext.>

go.jp/a_menu/sports/kihonhou/ (参照日2015年11月29日).

丹羽劭昭、村松洋子 (1979)「女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究」体育学研究、24 (1): 25-38.

セルジオ越後 (2006)『日本サッカーと「世界基準」』祥伝社.

杉本厚夫 (1986)「中学・高校運動部員における社会的アンビバレンスの変容」体育学研究、31 (3):197-212.

杉本厚夫・塩川拓司 (1989)「大学運動部における女子マネージャーの社会的アンビバレンス」『体育・スポーツ社会学研究8』道和書院: 161-182.

辻正二 (2001)「アンビバレンスの社会学」恒星社厚生閣、pp.1-24.

山本教人 (1990)「大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較」体育学研究、35 (2): 109-119.

山本教人 (1991)「正選手と補欠選手の運動部への参加動機と原因帰属意識」健康科学、13: 49-58.

全日本大学野球連盟 (2015) 加盟校部員数推移
http://www.jubf.net/info/plyernum_transition.html (参照日2015年11月29日).